



南極

第25号

平成23年4月16日
南極倶楽部会報

I agree but -----

芳野赳夫

1978年9月南極条約会議、通信専門家会議に日本代表として出席するため、私はワシントンDCのダレス国際空港に降り立った。空港には旧知の大使館科学班アタシェのS君が出迎えに来ており、直ちに日章旗の立った大使館の車でダウンタウンに向かった。明日から一週間の会議にはS君が同席してくれると思って話をしていると、どうも風向きが違ふ。

「本省からの訓令で全部先生にお任せしてあります」。日本代表は私1人だけ、えらいことになったと悔やんでも、もう遅かった。

今回の会議の議題の一つに、南極の気象通信回線の、東南極の親(マザー)局を豪州のモーソン基地からソ連のマラジョージナヤ基地(以下、マラ基地)に変えたいという、ソ連(当時)の提案があった。1日8回の地上気象観測データと2回の高層気象観測データは、毎観測時の約1分後には昭和基地、マラ基地からモーソン基地へ送信され、それらのデータはデービス基地を経て

メルボルンに、2分後にはメルボルンから東京を経て、北半球の気象GTS(世界通信システム)に乗せられワシントンDCに送られている。ソ連の提案は、マラ基地とモスクワ間の常時通信が可能なので、各基地の気象データをマラ基地に集めれば、サービス向上となるから変更したいというものであった。

しかし、筆者は「この議題は絶対通さないでください。他のことは全部先生の判断に任せます」との訓令を受けてきていたし、私自身も17次隊の往復に、インド洋にソ連艦隊が多数遊弋^{ゆうよく}しているのを見ており、17次隊の帰途マラ基地に立ち寄った時、マラ基地が南極条約に反して軍用通信・気象基地として機能している恐れのあることを目の当たりにしていた。

会議初日、会場のNSFに行くと大勢の各国のデレゲーションが集まっていた。JAPANと書かれた席に着くと、後ろに空椅子が5つある。他国は皆複数、中には10名もの随員を従え堂々たる国もあり、たった一人は日本のみ、後を振り返っても相談する相手もない。会議は始まった。初日は前回からの報

告、各国代表は質問に対しイエス、ノーと答えているが、斜め前の英国代表の老練な外務省条約局の外交官ヒーム氏は決してイエス、ノーと言わないのに気付いた。すべて I agree---又は、I agree but---を使い、他の連中が、さっきはイエスと言ったが、そのような意味ならノーに変更だ等とやっているのに対し、実にスマートなのである。

2日目、いよいよ議題に入る。ソビエトは英語を話さない主席、目の鋭いどう見てもポリティカルの次席と2名の随員、2名の太った中年女性通訳。早速、モーソンの親局をマラ基地に変える提案を出してきた。私は答えた。

「I agree but---過去18年間の昭和ーモーソン間の通信完成度は97%である。昭和ーマラ基地間は300キロメートルで、極域の短波では最も通信状態が安定し難い。もしソ連側に昭和ーマラ基地間の完成度が97%を上回るという信頼できるデータがあるならば、その時は変更も考慮する。それまで現在の回線を変える意思はない」。ソ連は会期中にデータを提出するとの答え、議長は、それまで結論は延期と宣した。瞬間、今まで緊張の極にあった各国代表間にほっとした空気が漂い、中にはウインクしてくる国もいた。大きな賭けであった。案の定、ソ連の返答は遂に最終日まで出なかった。その間ソ連の次席に誰も居ないNSFの廊下で待伏せされ、こずき回される一幕もあっ

た。

会議は終わった。土曜日、英国の次席と郊外にドライブに出かけた。彼は日本は実にうまくやった。日本はこの会議のカギを握っていたのだ、と大変ほめてくれたが、深夜、別れ際に、お前はもうソ連には行けないぞ、ブラックリストに載ってビザは出なくなったぞ、グッドナイト!

しかし、それは杞憂であった。82年秋、私はソビエトアカデミーの招待で、モスクワ、タシュケント、トビリシ、レニングラード(現:サンクトペテルブルグ)、アルハンゲリスクと旅を続けていたのである。私は、ソ連に対して一言もノーとは言わなかったから???

筆者注：本文は宇宙科学研究所(現:JAXA)のISAS ニュース No 24, 1983年3月発行、ISSN 0285-2861, 10ページ、短編随筆(いも焼酎)に掲載した文章に、数名の推薦を頂き若干加筆し再投稿したものです。

(3次冬、17次冬・隊長)

浅虫実験所と南極とのかかわり

星合孝男

遠かった南極

1956年のある日仙台市片平丁の生物学教室の講義室で、科学朝日の編集長をされている半澤朔一郎先輩(昭和8年卒)のお話を聞いた。今、国際地球観測事業の一つとして南極観測が始

まろうとしている。日本もこれに参加するので、昨年末捕鯨船に便乗、日本が分担する地域の氷海を偵察・体験してきた、という内容であった。しかし、私にとっては捕鯨も南極も遠い存在でしかなかった。役にも立たない南極を調べるよりも、そしてクジラを獲るよりも、日本の沿岸漁業ことに養殖漁業を進行すべきではないか、などと感じたのであった。磯歩きの徒としては当然であった。

浅虫の映画館で

南極観測は世論の支持を背景に実現し、1957年1月には昭和基地が建設され、第1次隊の11人が越冬に成功した。浅虫に赴任した私は、同じ年の4月にすでに着任しておられた講座の先輩、鳥海^{まこと}博士と、題名も内容も殆ど忘れてしまった南極観測隊の記録映画を、“米田^{よねた}の映画館”を見た。当時浅虫には2軒の映画館があり、1軒は駅より少し北の海岸に、もう1軒は東北本線の線路を挟んで山側にあった。その山側の映画館が米田の映画館で、お酒などを賣っていた米田さんの経営によるものであった。憶えているのは、雪上車が水しぶきを上げて雪原を走るカットだけで、お伴した鳥海先生に震えながら、「南極の映画をみるのに応しい寒さですね。」と暖房の足りなさをかこったのが忘れられない。鳥海先生は^{ほたるだに}蛭谷のあるお宅に離れを借りてお住まいになっておられ、私は^{みやがた}宮形さんと

いう時計屋のお店の二階の一部屋を借りていた。朝食はパン、昼食の食事は寄宿舍で出してもらっていた。

着色氷中のプランクトン

こんな南極との縁が一轉したのは、1959～60年、第4次観測隊の夏隊員として、加藤講座の助手、松田達郎さんが参加してからである。松田さんは宗谷の航路に沿って表面海水中のプランクトン量の地理的分布を調べた。そしてそれだけではなく、昭和基地の北方海域で、植物プランクトンで褐色に色着いたと言われる海水も採集し、仙台に持ち帰った。1960年の晩夏、実習が終わると私は仙台に出て、この海水と海水直下の海水中の植物プランクトン固定標本とを検鏡した。海水にはかなり高密度の珪藻が含まれていた。どうして珪藻が海水に入っているのかはわからないままに、珪藻群の種類組成の比較をすることで、一応のまとめをすることが出来た。この頃、松田さんは第5次越冬の生物担当隊員として、南極へ再度旅立った。

浅虫シンポジウム「南極の生物」

浅虫の臨海実験所には実験所後援会という財団法人があり、水族館入場料を収入源として研究支援をしていた。その支援の一つとして、1957年から“浅虫シンポジウム”が開催されていた。毎年分野を決めて関係の研究者を招待し、研究発表と官舎・寄宿舍を利用し、寢食を共にしての討論と情報交換をす

ることになっていた。第4回のシンポジウムのテーマは「南極の生物」で、低温生理学の青木 廉^{きよし}教授と平井越郎所長が主催者であった。このシンポジウム、残念ながら南極観測事業の中で、大きくは取り上げられたことはなかったが、私にとってこのシンポジウムは、画期的な意味を持つものであった。

着色氷の形成過程

海氷の中にどうして珪藻が入っているのかを知りたいと、強く思っているのも南極の現場を知らない私は、衝撃的な話を耳にしたのであった。シンポジウムの出席者で、ご自身も南極を体験された藻類分類学者、福嶋博先生がこんなことをおっしゃった。第5次の夏隊として宗谷に乗った目黒 熙^{ひろし}さんという東京大学農学部の大学院生が、着色氷を調べ、その形成の過程を明らかにした。近々論文も出る、とのことであった。何とも羨ましい話であった。やがて、海氷中での珪藻の増加過程が記述された目黒さんの論文を読むことができ、是非現場で着色の過程を見たいとの思いが、一層強まった。

浅虫の南極展

1962年の春になると松田さんが、越冬中の研究成果と生活に関わる資料をたずさえて帰国した。加藤、平井両先生は、これらを材料にして展覧会を開こうと合議した。出来れば水族館とは別の建物を使って、となった。そこで、当時南極海で活躍していた大洋漁業に、

支援を要請しようということになり、同社の青森支店をお尋ねした。支店長は島田さんという方だったと思うが、もはや記憶は定かではない。大変太っ腹な方で、先生方の話を聞くやいなや「わかりました。ご協力しましょう。丁度工場の一部にする建物を造る計画があり、間もなく出来あがります。建物は来年ですから8月から11月の間なら。これでお貸しします。」と即答してくださった。

樺太犬トチ

展覧会はお客の入る夏休みの8月から、恒例の水族館閉館の11月下旬までの間とし、鉄板製のカマボコ型の建物をお借りすることになった。おまけに、組み立ても解体も、大洋漁業関係の建設業者の手によってなされたのであった。

展示品は松田さんの持ち帰った観測結果、標本や生活用品、野外行動用装備、雪上車など多岐に亘った。なかでも、第5次の村山雅美観測隊長のご好意で、昭和基地で越冬した樺太犬トチをお借りできたのは大きかった。トチは展示場入口に繋がれ人気を博したのであった。開館に合わせて、村山隊長、藤原健蔵、松田達郎両隊員の3人による講演会が青森で開催されるなど、意気軒昂たるものがあつた。

浅虫での焦り？

1963年南極観測事業が中断される頃になると、せっかくここまで続けた

ものを中断するのはいかにも勿体ない、と思うようになっていたが、この年私は夏泊半島の潮間帯の仕事を続けるとともに、新しく財団の事務的な仕事にもかかわらざるをえなくなった。当時若い研究者が米国はじめ、欧州諸国への新知識を求めて出かけて行くことが多くなっていた。私も浅虫でいつまでも、べんべんと時を送っていていいものかと、いささか焦っていた。南極へもそう簡単には行けそうにないし、第一行けたとしても何をするのか、ただ単に着色氷を見たい、着色の過程を見たいというだけではと考えてみたりもした。

下北調査から帰ると

1964年8月11～14日自然保護協会の下北半島調査の一環として、加藤先生のご指示で、山本護太郎先生、西平守孝さんと私の3人は下北半島東海岸の潮間帯生物の調査をした。脇の沢から、今まですっかり観光名所になってしまった佛が浦を経て大間までの岩礁潮間帯の生物を観察した。西平さんは得意の潜水で、佛が浦の潮下帯の観察と採集をしたのであった。この調査で私は下北東海岸の動植物相に南国色が濃いことを実体験したのであった。対馬暖流が津軽海峡を西から東へ通り抜けることを思えば、当然なことであるが、それを具体的に実感できたという感激は、まことに大きなものであった。こんな感激をかみしめながら帰宅した

私を、もう一つの驚きが待っていた。「松田さんがいらして、こんど科学博物館に出来る南極部門に移らないかとおっしゃってました。」と妻が言うのであった。

ああ、上野駅

やがて浅虫に来られた加藤先生は「こんどは君が決めていいよ。行ってもいいし、残ってもいいんだ。でも行かれると浅虫は困るだろうな。」と相変わらず謎のような発言をされた。そして、「これまでの仕事をまとめて、学位論文にする。準備をするように。」と続けられた。いろいろ思案したが、私は結局松田さんのお誘いに乗ることにした。こうして、1965年4月1日朝、上野駅公園口を出た私を“おめでとうあなたも今日から東京人”と大書された横断幕が待っていた。世の中は“ああ上野駅”の時代だった。

南極で“つぶ篋”漁をする

浅虫を離れてからも、浅虫との縁は切れなかった。1966年に第8次隊員として越冬することになった私は、底生生物の採取をしようと思い、沼宮内隆晴さんをお願いしてつぶ篋を送ってもらった。氷の張った海でも使い易く、かつ獲物を集め易い道具であり、昭和基地の海底の動植物の生活の有様を知る、手がかりを与えてもらうことになった。私だけではなく、何人かの研究者がこれを利用して、調査や材料の採集を行ったのである。

1974年8月24日、浅虫臨海実験所の創設50周年記念の講演会には、東北大学生物学教室の栗原康教授の前座として、話をさせていただいた。“南極に生きものを見る”と題した私の話に、つぶ篋で獲ったウニ、ヒトデ、魚のことが含まれていたことは言うまでもない。

共同利用の浅虫・南極

おそろおそろ入った南極観測の世界であったが、10年近くが経ってみると、何となく周囲を見廻る余裕も出てくるし、お世話役に廻る場面にも出会うことも少なくない。そんな時、臨海実験所での生活と仕事が共同利用研究所としての性格を持っていたことと、南極観測のお世話役である国立科学博物館極地研究部＝国立極地研究所の仕事とが似ていることに気付いた。臨海実験所の職員も極地研究所の職員も、それぞれの所の一員としての本来業務と、外来者との交流を必要とする共同・協力業務に同時にたずさわらなくてはならない点である。後者、つまり交流については、自分の職場にいて外来の人と接触することを通して研修することもできるが、外に出て、つまり外来者としての立場としての立場に立ってみて、外来者が何を望んでいるかを読み取る能力を身につけるのも、研修の道と思えた。

浅虫から南極へ

その頃観測事業の規模が、少しでは

あるが拡大する方向にあった。夏期に観測船上で行うプランクトンを主とした生物調査を、2人で行う事ができるようになった。そこでその2人のうち一人の仕事を、実験所の技官に担当してもらえないかと考えた。当時の大学の体制では、技官が所属する職場外に出て活動することは、極めて困難であった。しかし、臨海実験所としても有益な事ではないかと考えたからである。

心安さも手伝って、昔の同僚・沼宮内さんに秘かに相談すると、賛成してくれた。恐らく所員皆さんの同意も得た上でのことであろう。長内健治所長のご承認も得、1975年秋に晴海を出た第17次隊にはまやま間山(現・柿沼)つとむさんが、そして1978年野20次隊には田村清一さんが、夏隊の生物定常観測隊員として参加した。2人の活動結果は専門の研究者との共著という形ではあるが、国立極地研究所の出版物に英文で報告されている。浅虫の活動のためにも、この拳が貢献したであろうと、私はいまだに確信している。

(7次・海洋生物、8次冬生物、
16次冬・隊長、28次夏・隊長)。

南極の思い出 —氷上大運動会— 塚崎展生

南極には雨は降らない。快晴の空の下、白い氷の上で、大運動会は執り行

われた。メンバーは観測隊員、そして、ふじ乗組員全員である。



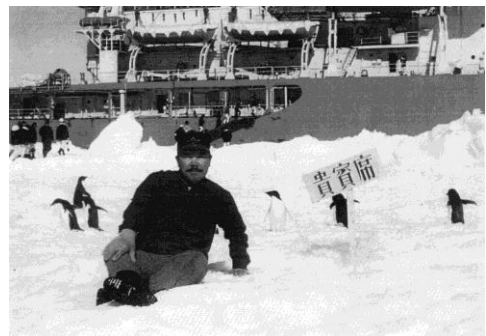
氷上はまぶしく、空気は冷たい。参加者一人一人の顔には笑みがこぼれる。

種目は百足リレー、ボール探し競技、綱引き、氷採り競技、バレーボール競技等であった。ボール探し競技はメガホンを逆さに持ってその穴をのぞきボールを探したら、スタートからゴールまで、そのボールを見失わないように蹴りながら走る競技である。視界が狭くなるので、難しい競技である。また、綱引きは、地上ではなく氷上で行うので、力を入れるとよく滑り、尻もちをつきやすいので、これも難しい。氷採り競技、これは一番大きくて重く、氷らしい硬い氷を採取してきた者たちが一番になる。そして、バレーボール競技は、六人制で、ローテーションもと入れた本格的なものである。ジャンプして、着地ならず着氷すると。これもまた滑って転びやすく、面白い。ちなみに、私はこのバレーボール競技に、通信班として出場し、優勝は逃したものの、かなり良い成績を収めたことを

記憶している。

会場には、貴賓席も設けられた。そこには、皇帝ペンギンが1羽、2羽、3羽と、三々五々訪れて、各競技を観覧してくれた。皇帝たちには、缶ジュースがふるまわれたが、彼らは缶の口を覗き込むだけで、決して飲もうとしなかった。

競技の最中には、好奇心旺盛なアデリーペンギン達が、コースに入ってくるので、これには困った。彼らには客席に戻るよう説得するのだが、なかなか言う事を聞いてくれない。ふと、私は、少年時代のトンボ採りの方法を思いついた。そして、ペンギンの顔の前で、人差し指を、くるくると回し続けて見た。ペンギンは、それに応えて、指の動く方向を、目で追いかけて、頭を回し続けるので、しまいには、目が回って、氷上にひっくり返ってしまうのであった。倒れたペンギンを抱えて、ようやくコースから出てもらった。とこ



ろで、私が「ふじ」に乗船したのは、第11次、12次、15次の3回だが、そのうちの第11次には右プロペラ4

枚欠損によるピセット、第12次には右プロペラ1枚欠損によるピセットが発生した。

ピセットから、いつ脱出できるのか、各員は普段よりも余分のストレスと不安を抱えながら、南極行動を従事する毎日が続く。こうした状況での氷上大運動会は各員の士気を高める上で格好の機会となった。結果として、期待にもれず、運動会の参加者は皆、元気と明るさを取り戻したのである。そのような訳で、私は、「南極の思い出」の一番に、この「氷上大運動会」を取り上げた。それは、単なる「運動会」ではない。南極の氷に閉じ込められた、その氷上という特別な舞台における「大運動会」だったのである。

(追伸：塚崎展生さんは5年前から、自宅療養中でした。この度、娘さんが塚崎さんのお話を口述筆記して原稿を作成し、投稿したものです。)

編集後記

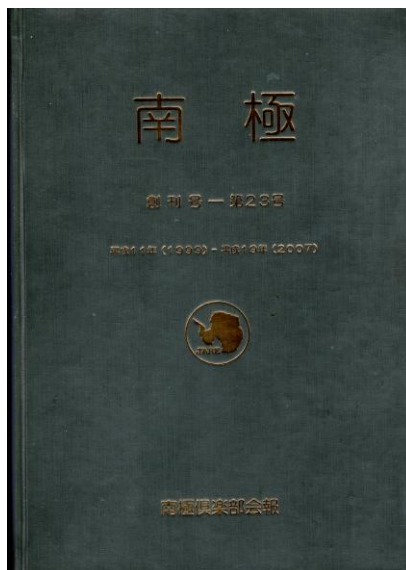
会報「南極」第25号をお届けします。芳野赳夫さんの国際会議の一コマ、星合孝男さんの浅虫時代の思い出、塚崎展生さんのふじピセット時の大運動会の模様、ありがとうございました。

星合さん及び芳野さんの玉稿は南極倶楽部会報第24号に、「会報」はアーカイブスに関する話題を歓迎とのコメントにお応えしての原稿でした。塚

崎さんのピセットに関連しては本誌、第8号付録112頁(i-iv)、南極「歌の玉手箱」をご覧ください。

次号第26号は7月16日発行予定です。6月30日原稿締め切りです。

南極倶楽部会報「南極」は創刊号(平成11年)～第23号(平成19年)を一区切りとして、製本することになりました。88名の会員から執筆いただいたものです。黒地に金文字、金口ゴマークの入ったハードカバーで書籍風にまとめました。B5版、376頁、索引付き、発行日は平成23年3月26日。100部限定、製本代実費でお配りいたします。



連絡先 神田啓史、大学共同利用機関
法人 情報・システム研究機構 国立極
地研究所 〒190-8518 東京都立川市
緑町10-3、TEL: 042-512-0770
FAX: 042-528-3684
e-mail: kanda@nipr.ac.jp